

今年は、東北地方や北海道でクマの大量出沒が確認されましたが、軽井沢町でのクマの出沒状況は例年と大きく変わらず、追い払いを要した回数も昨年同様でした(計265回、昨年251回)。ただし、特定の個体の追い払いに、長時間を要する傾向がありました。一つの理由として、親子連れや発信器を付けていないクマも追い払いの対象になったことがあげられます。

<No.299♂>

この1歳のオスグマは、これまでに例がないほど長い間、母グマ、兄弟グマと行動を共にしていました。これまでも子連れの母グマに発信器を装着し、追い払いを行ったことはあったのですが、今回は子グマに発信器を付けたため、母グマの動きが読みにくく、追い払いに時間を要しました。

No.299♂は6月に旧三笠ホテル北側の国有林内で捕獲しました。このわなは市街地に出沒しうるクマに、予め発信器を装着することを目的として設置していたものです。発信器とGPSを装着して奥山で放獣しましたが、別荘地に戻ってきた際に追い払いを行うと、移動するスピードの遅さを感じました。実は放獣後に母グマと兄弟グマと一緒に合流していたのです。このように、親子連れで発信器を装着しているのが子グマというパターンは、3頭を森へ安全に誘導しなければならないため、追い払いは試行錯誤を繰り返しました。

結局、No.299♂は10月末まで母グマ、兄弟グマと一緒にいました。さすがに冬眠は一頭でしたようです。親別れを済ませて単独になったことで、翌春からどのように行動が変わるのでしょうか。引き続き、動きに注視していきます。

<No.302♂>

住宅や小学校のある大日向地区で、5月24日以降、発信器を付けていない若グマの目撃が続きました。7月8日にNo.302♂を捕獲するまでに12件の目撃情報があり、目撃された時間は全て日中でした。目撃通報を受けて駆け付けたベアドッグが追い払ったこともあり、その時は驚いて逃走していましたが、その後も一般の方に目撃されるなど、行動は変わりませんでした。

最終的には小学校の登校時間に住宅地で目撃されたため、捕獲わなを複数設置したところ、日中に捕獲されました。捕獲されたクマはそれまでの目撃情報から同一個体だと考えられ、出沒状況から、残念ながら駆除せざるを得ませんでした。今後は発信器を付けるための捕獲により力を入れ、効率的な追い払いを行うことによって、人とクマの安全を守っていきたいと思います。



11月に入り、ようやく単独で生活し始めたNo.299♂(野鳥の森北で玉谷が撮影)

ベアドッグ支援団体

(株)こもれび



障がいのある方々に、日中活動として働く場を提供すると共に、知識及び能力の向上のために必要な作業等の就労支援を行っている企業。ベアドッグの訓練用トリート(鹿肉等のジャーキー)をご提供いただきました。

VANTAGE 株式会社



原料の原産地や純度など、科学的根拠に基づいたNMN等のサプリメント製品を開発販売している企業。モニターとしてベアドッグたちのNMNサプリメントをご提供いただきました。

いよいよ始まった、ベアドッグ未来プロジェクト

ベアドッグはただクマを追うだけではなく、人と接する機会も非常に多いため、クマに対峙していく勇敢さや狩猟欲はもちろん、人と一緒に働く意欲や人懐っこさも求められます。今回、繁殖プロジェクトの大役を担うのは3世代目のメスのベアドッグの「レラ」。レラは生後2ヶ月で行われたベアドッグになるための適性テストにおいて、上記の能力のすべてを持ち合わせていることがわかったために繁殖犬としての任を受け、その後も避妊を行わず、その時が来るのを待っていました。

2世代目のタマとナヌックはすでにシニア期(7歳以上)に入り、2023年4月現在、10歳を迎えようとしています。一方でレラは5歳となり、繁殖適齢期を迎えました。よって、現状のベアドッグ体制を維持するためには、今このタイミングで、レラの繁殖に挑戦し、子犬の育成を進めていく必要があります。

そこで、レラの発情に合わせて繁殖を試みることを決定し、2022年12月から準備を始めました。当初は自然繁殖を目指していましたが、

1) 米国のベアドッグ育成機関 Wind River Bear Institute(以下、WRBI)の都合により、繁殖相手のオス犬への狂犬病ワクチン接種と抗体価検査が遅れ、レラの交配予定日(7月下旬)までに検疫を通過できない可能性がでてきたこと。

2) レラの発情サイクルが不安定なこと。

を理由に、2月以降、凍結精液による人工繁殖に方針を切り替えました。この方法は繁殖に臨む犬たちはもちろん、多くの関係者の協力が必要で、WRBI及び米国の精液採取の獣医師、精液輸送保管会社、かかりつけ獣医や人工繁殖手術を行う執刀獣医と綿密に調整を図りながら進めました。

そして、2023年8月20日、東京の動物病院で人工繁殖を行い、手術も無事成功しました。とはいえ、凍結精液による人工繁殖は開腹手術を伴うため、レラにはかなり負担がかかりました。

「何とか無事に受胎してってくれ」と毎日祈りながら迎えた妊娠判定日の9月21日。レラの交配に関わったすべての方々の思いを背負いながら、かかりつけ獣医に行き、超音波診断による妊娠判定を受けました。しかしながら、結果は「失敗」でした。この人工繁殖の挑戦のために、弊団体の会員の皆さまを中心に、40名の方々からいただいた111万5千円のご寄付を手にしながら、あまりの悔しさと申し訳なさで心が張り裂けそうになりました。

しかし、ここで諦めるわけにはいきません。何とか

次世代にベアドッグをつなぐためにも、既にご厚志を頂いていた方々の想いに応えるためにも、2023年11月からファンドレイジング運営会社「READFOY」と連携し、全国に広くベアドッグ活動を発信しながら、改めて運営資金を募ることを決心しました。そして、ベアドッグ活動の意義やこれまでの成果、将来の展望を描いたプロジェクトページ(<https://readyfor.-jp/projects/picchio-beardog2024>)を開設し、12月11日から1ヶ月半の期間でAll or Nothing型のファンドレイジングに挑戦することになりました。

ちょうどこの頃、秋田や岩手など東北地方を中心に、12月になってからもクマが里に出沒し続け、人身事故やクマの捕殺に関する全国ニュースが連日放映されるという異常な状況が発生していました。最終的には2023年度は環境省が統計を取り始めた2006年以降、過去最多となる人身事故件数(219件)、及びクマ類の捕殺頭数(9,097頭)となり、人もクマも大変不幸な年となりました。

このような状況を受け、軽井沢町のクマ保護管理の事例や、その中で活躍し続けてきたベアドッグたちに改めて脚光が当たることとなり、800名を超える皆さまから総額850万円を越えるご支援を賜り、ファンドレイジングは大成功に終わりました。しかし、これから本番です。皆さまの想いを背負い、いよいよ2024年夏、レラは自然交配で繁殖に再挑戦します。今回の繁殖を何とか無事成功させてあげられるよう、まずはしっかりとレラをサポートし、そして、軽井沢のベアドッグ活動を継承しつつ、少しでもベアドッグたちの活躍の場を広げられるように尽力してまいります。改めまして、今後とも応援のほど、よろしくお願い申し上げます。



ハンドラー 田中とレラ